

## 唐宋時代嶺南地域の州県に関する官印

著者	谷口 房男
著者別名	TANIGUCHI Fusao
雑誌名	アジア・アフリカ文化研究所研究年報
巻	37
ページ	16-32
発行年	2002
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00009391/">http://id.nii.ac.jp/1060/00009391/</a>

## 唐宋時代嶺南地域の州県に関する官印

谷 口 房 男

### はじめに

この数年来、明清時代の広西土司制度に関する調査を行うため、しばしば広西チワン族自治区を訪れ、単に文献史料のみならず、遺物資料などの収集に努めている。その際に、各地の博物館や文物管理所などで、かつて土官が使用していたと思われる土官印に関する情報とその実物をみることで、その一端についてはすでに発表したことがある。<sup>(1)</sup>ところが、時に現地で土司制度以前の官印を見ることがあり、とくに本稿では、唐宋時代嶺南地域の州県に関する官印を紹介したい。

本稿で唐宋時代嶺南地域の州県に関する五つの官印を取り上げ紹介する意図は、およそ次の五点である。① 今日までに知られている唐宋時代の官印は、出土印のみならず伝世印を含めても、秦漢六朝時代の官印や元明清時代の官印に比して、非常に少ないこと。② 「羈縻」の二文字を冠する官印は、「宜州管下羈縻都黎県印」以外に確認されていないこと。③

「驩州之印」は個人が所蔵しており、従来殆ど公開されていないこと。④ 「平琴州之印」と「宜州管下羈縻都黎県印」を紹介した掲載誌紙の一

部は、極めてローカルな刊行物であること。⑤ 唐宋時代における嶺南地域は、(a) 異民族の多く居住する地域であり、(b) 今日の中国とベトナムに跨る地域であり、(c) 中華世界の拡大をみていく上で、重要な地域であること。以上のような諸点から、五つの官印を紹介する。

なお本稿でいう唐宋時代における嶺南地域とは、いわゆる五嶺の南であり、唐代における嶺南道であり、宋代における広南東西路であり、今日における中国の広東省と広西チワン族自治区およびベトナムの北部までを含む地域を指している。但し、ここでは広東省を対象外とし、主として広西チワン族自治区およびベトナム北部の地域を対象としている。またここで取り上げる官印は、官署印の中でもとくに地方行政に関する州県の官印に限り、軍事関係などの官印を対象から外した。<sup>(2)</sup>

歴史学研究における文献史料の重要性は、改めて論じるまでもないことであろう。とくに華南民族史を研究していく上で、当該地域の民族自身からの文字で記した文献史料は極めて少ない。そればかりでなく、現存する史料の殆どが漢人知識人によって記された断片的なものであり、彼らの民族認識を反映しているために、時に事実を把握する上で一定の限界があ

るとともに、当然のことながら偏見のみならず誤りも含まれているのである。こうした史料の性格とその限界を克服するためにも、遺物資料を用いて文献史料の不足を補うことは、民族史を研究する上で、とりわけ重要な作業の一つといえよう。

中国における歴代諸王朝が民族政策として実施した羈縻政策は、早くからさまざまな形で行われたのである。例えば、民族地域の地方行政組織として設けられたのは、秦漢時代における道・属国都尉であり、南北朝時代における南朝の左郡・左県であり、唐宋時代の羈縻州・羈縻県であり、元明清時代の土司制度である。このような中国における歴代諸王朝が実施した民族政策を理解する上では、とくに土司制度の実態を究明することが重要であり、そのためにもそれ以前の諸制度と関連させて体系的に把握していくことが必要といえよう。

従来、唐宋時代の羈縻州について、とりわけ嶺南地域におけるその実施状況については、必ずしも十分に取り上げられなかったものであり、また極めて概括的な指摘にとどまり、その実態について殆ど明らかにされてこなかった。<sup>(3)</sup> 本稿では今日までに確認されている唐宋時代嶺南地域の官印を、とくに地方行政組織としての州県の官印を紹介し、当該時期における羈縻州・羈縻県との関わりについてふれてみたい。

本稿で紹介する五つの官印について、まず「武夷県之印」は、広西チワン族自治区博物館に所蔵されており、その発現の経緯などを広西チワン族自治区博物館の元館長である王克榮氏が明らかにしている。<sup>(4)</sup> また「純化県之印」は、桂林博物館が所蔵している。<sup>(5)</sup> さらに「驪州之印」は、南寧市在住の文有錚氏が所蔵しているものであり、従来殆ど公開されていなかった。

たまたま広西チワン族自治区博物館の前館長蒋廷瑜氏の紹介により、所蔵者のご好意で実物を見せていただくことができた。

一方、「平琴州之印」と「宜州管下羈縻都黎県印」は、ともに上海博物館が所蔵しており、孫慰祖氏と蒋廷瑜氏等がすでに紹介している。<sup>(6)</sup> 但し、この二つの官印がどのような経緯から、上海博物館に収蔵されるようになったかを明らかにしていない。

## 一、唐宋時代嶺南地域の州県に関する五つの官印

### (一) 唐宋時代の官印

中国では官僚制の発達に伴い、官印の制度が早くから整えられてきた。古く文字が木簡や竹簡に記されていたころは、官印が文書を通達するために封泥用として使用され、また官職を表徴するために佩帯用として用いられ、それによって官印の規模も比較的に小さく、おおそ方一寸(約二センチ前後)であり、印面の文字も陰刻(白文)であった。ところが紙の使用が増すに伴い、魏晋南北朝時代になると封泥用としての役割が廃れていくようになり、佩帯用としての役割も薄れていった。やがて唐宋時代になると官印の性格が大きく変化し、それまで官名印(通官印)が主であったのに対し、官署印が中心となっていた。それに伴って印の規模は大きくなり、従来の約二倍となり、一辺がほぼ五センチ前後となった。また今日のような油混じりの印泥ではなく、液状の印泥(水印と呼ぶ)であるために、印面の文字も陰刻から陽刻(朱文)へと変わり、文字の彫りが深く(約一センチ弱)なるとともに、丸みを帯びた文字へと変化した。<sup>(7)</sup>

このような官印の用途や役割の変化を踏まえ、葉其峰氏は隋唐五代の官

印の特徴について、① 官署印が多くあらわれ、官名印の使用が少なくなり、② 「〇〇之印」といった印文の官署印が主体となり、「朱記」・「記」もあらわれ、③ 印面の文字が陽刻（朱文）で、印自体の規模も大きくなり、鈕型も橢鈕が多くなった、と指摘する。<sup>(8)</sup>

また葉其峰氏によれば、宋代の官印は唐代の官印と規模や印面の文字などで共通するところが多く、とくに宋代の官印の特徴として、① 印背に鑄造時期（右側）と鑄造機関（左側）の款記が刻されるようになり、② 南宋初期の官印の款記は、印背に「行在」あるいは年号が刻まれるようになり、③ 印文が円転盤曲で、印面全体に文字がちりばめられるようになった、と指摘する。<sup>(9)</sup>

## (二) 嶺南地域の州県に関する五つの官印

これまでに現地で実物を確認することができた唐宋時代嶺南地域の州県に関する官印は五つであり、それらの印面・印背の文字や規模などをまとめて示せば、おおよそ次のようである。

No.	時代	印 章 名 (印 文)	鈕型	材質	規 模 (cm)	ハ 注 記
①	唐	武夷県之印(朱文、小篆)	鼻鈕	銅印	高四・二×辺五・四×厚一・五	ハ1
②	唐	純化県之印(朱文、小篆)	鼻鈕	銅印	高四・〇×辺五・四×厚一・五	ハ2
③	唐	驪州之印(朱文、小篆)	鼻鈕	銅印	高三・八五×辺五・八×厚一・三五	ハ2
④	唐	平琴州之印(朱文、小篆)	杙鈕	銅印	高三・五一×辺五・二三×厚※ハ3	ハ3
⑤	宋	宜州管下羈縻都黎県印(朱文、小篆)	直鈕	銅印	高五・一×辺五・六×厚※ハ3	ハ3

なお④⑤の鈕型は、『上海博物館蔵印』によるも、<sup>(10)</sup> 両印ともに橢鈕である。

ハ1V「武夷県之印」は、盒子（ケース：高九・五×辺六・六×厚五・〇センチ、四つの心形の鏤孔あり）入りであり、本稿末尾に付した写真を参照のこと。

ハ2V「純化県之印」と「驪州之印」は、本稿の末尾に付した写真のように、腐蝕による剥離が酷く、厚さは製造時の寸法よりも小さくなっている。

ハ3V「平琴州之印」と「宜州管下羈縻都黎県印」は、上海博物館に所蔵されており、予め連絡をして当館を訪れたが、都合により十分な調査ができなかった。とくに「宜州管下羈縻都黎県印」は、同博物館三階の「中国歴代璽印館」に展示されており、現物をガラス越しに確認するにとどまる。また「平琴州之印」は、孫慰祖氏に依頼して印影の写真をお借りするとともに、印の規模などについて教えていただき、自ら実測することができなかった。<sup>(11)</sup> ※印は不明を示す。

No.	印 背 文 字 (款 記)	所 蔵 機 関	備 考
①	右：武夷県之印(陰刻、楷書)	広西自治区博物館	出土印…一九八四年
②	右：□□：(陰刻、楷書) ハ4	桂林博物館	出土印…一九七七年
③	右：驪州之印(陰刻、楷書)	文有錚氏蔵	二〇〇〇年三月購入
④	右：平琴州(陰刻、楷書)	上海博物館	ハ5
⑤	左：紹興二十四(陰刻、楷書)	上海博物館	ハ5
	左：年文思院鑄(陰刻、楷書)		

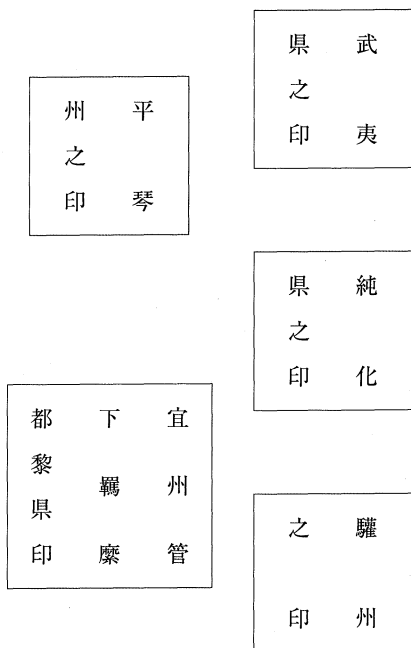
ハ4V「純化県之印」はとくに腐蝕による剥離が酷く、印背の右側に塗料で所蔵番号を記しており、その款記を判読することが困難であり、僅かに「純化」二字が右側の傍の一部を確認できるのみで、全体と

して何字を刻したのかさえ判断できなかった。

△5▽「平琴州之印」と「宜州管下羈縻都黎県印」の印背の款記は、ともに『上海博物館藏印』による。

### (三) 印面の文字配列

五つの官印の印面に刻されている文字の配列は次のようであり、その印影などの写真を末尾に付している。



この五つの官印の中でも、とくに「宜州管下羈縻都黎県印」は、県名の前に「羈縻」の二文字を冠していることが注目される。とりわけ唐代の「武夷県之印」や「驩州之印」は、ともに羈縻州県に関する官印でありながら、「羈縻」の二文字を冠していないのである。このような「羈縻」を冠した官印は、これ以外に出土していないことから、極めて貴重なものといえよう。

唐宋時代嶺南地域の州県に関する官印

## 二、五つの官印に関する検討

### (一) 「武夷県之印」

まず武夷県の地理的沿革について、『旧唐書』卷四一・地理志、嶺南道安南府の条に、

武峨州、下、土地与交州同。置武峨州、失起置年月。天宝元年、改為武峨郡。乾元元年、復為武峨州。領県五、戸一千八百五十、無口。無兩京道里及四至州府也。武峨、州所治也。武縁・武勞・梁山、皆与州同置也。如馬。

とあり、安南都護府管下として武峨州をあげ、その設置年を不明とし、天宝元(七四三)年に武峨郡と改め、乾元元(七五八)年に州に復し、その属県を五としているが、武夷県そのものを記していない。ところが、『新唐書』卷四三上・地理志、嶺南道の条に、

武義州武義郡、下、唐置。戸千八百五十、口五千三百二十。県七。武義、下。如馬、下。武義、下。武夷、下。武縁、下。武勞、下。梁山、下。

とあり、武義州の属県を七とし、その一つとして「武夷(県)」がみえている。なお『宋史』卷九〇・地理志、広南西路邕州の条に、

羈縻州四十四……武義州、……並属右江道。

とあり、宋代の武義州は邕州管轄下の右江道に属する四十四の羈縻州の一つである。また『太平實字記』卷一七一・嶺南道、武義州の条に、

武義州武義郡、今理武義県。土地与安南府同。唐立為粵州。天宝元年、改為竜水郡。乾元元年、復為粵州。領県四、竜水・崖山・東璽・天河。

已上四県、与州同置。

とあり、何故か唐代の武峩州武峩郡が、粵州と結びつけられているのである。ここには明らかな脱漏が認められる。先に引用した『旧唐書』卷四一・地理志、嶺南道安南府武峩州の条の直後に、

粵州、下、土地与交州同。唐置粵州。失起置年月。天保元年、改為竜水郡。乾元元年、復為粵州。領県四、無戸口数、亦無兩京道里及四至州府也。

とあり、武峩州の「土地与交州同。……如馬。」を脱し、「粵州、下、」以下の文を繋げている。ここには単に一文を脱するにとどまらず、武峩州と粵州とを結びつけるという誤りを犯している。なおその粵州について、『万暦版』広西通志』卷三・慶遠府疆域、歴代沿革の条に、

慶遠府、秦象郡地、漢為交趾日南界、後淪于蛮。唐始置粵州。乾封中、改曰宜州、治竜水県。天宝初、改竜水郡。乾元初、復為宜州。宋宣和初、置慶遠軍節度、咸淳初、改慶遠府。元改慶遠路、後改為慶遠南丹溪洞等処軍民安撫司。

とあり、唐の粵州竜水郡が乾封中に宜州に改められ、宋の宣和初めにそこに慶遠軍節度使を置き、咸淳初めに慶遠府と改めたとしている。しかし、ここには粵州と武峩州武峩郡との結びつきが全く示されていない。むしろ粵州と慶遠府との繋がりを示している。一方、『文献通考』卷三二・輿地考、古南越の条に、

武峩州。土地与安南府同。唐置武峩州。或為武峩郡、属嶺南道。領県五、武勞・如馬・武祿・武峩・梁山。宋為邕州所管右江道羈縻州。

とあり、唐代の武峩州を安南都護府管下に、宋代の武峩州を邕州管下の右

江道に属する羈縻州としている。但し、その領県に武夷県が見えていない。さらに『読史方輿紀要』卷一二・広西、安南升華府の条に、

武夷廢県。在府境。唐置。天宝初、曰武峩郡。乾元初、復故。新唐書、州領武峩・如馬・武義・武夷・武祿・武勞・梁山等七県。後廢於蛮。

とあり、かつて唐代に置かれた武夷県を安南升華府の境内にあったとし、武峩州の領県として『新唐書』により武夷県をあげている。

唐代の武夷県について、『中国古今地名大辞典』には、『武夷県』唐置。後廢。在今安南北境。」とあり、ベトナム北境としている。<sup>(13)</sup>

ところで、一九九八年十二月に広西チワン族自治区博物館を訪れた折りに、同館の新装開館記念特別展示として、「広西文物珍品展」が開催されており、「銅印：三国・清時期」のコーナーでこの官印を見学した。その展示の解説プレートには、

武夷県銅印…唐 一九八四年隆安県城廂出土。武夷県在今隆安県境。

拠《新唐書・地理志》記載為唐代所置羈縻県。該印正面陰文小篆“武夷県之印”。

と紹介されていた。「武夷県之印」（銅印）は、一九八四年に隆安県城廂（現在の広西チワン族自治区百色市隆安県城廂鎮）で、工事中に堀り出されたものであり、唐代の武夷県を今日の隆安県境内であるとしている。

この点については、王克榮氏がすでに指摘しているように、唐代の武夷県の位置を、この官印が出土した隆安県境内としている。但し、王克榮氏はなぜかその根拠を明示していない。少なくとも先に引用した『旧唐書』地理志などの諸史料が、唐代の武峩州を安南都護府管下としており、その武峩州をベトナム北部に位置させ、その属県である武夷県の所在地も、ベ

トナム北部と考えられている。それ故に、『中国古今地名大辞典』が、ベトナム北境としているのであろう。一方、『宋史』地理志などは、宋代の武峨州を邕州管下の右江道に属する羈縻州の一つとしているが、その属県として武夷県を記していない。ところで、『越』陶維英編『越南歴代疆域』

<sup>(14)</sup>には、武峨州武峨県の位置について、『太平寰宇記』に武峨州の治所が武峨県であり、土地は安南府と同じとしており、また中国の広西省慶遠府に武陸県があり、それがかつての武峨県でるとし、武峨州も広西省慶遠府一帯であるという。さらに『読史方輿紀要』に武峨（州県）をベトナムの広南省升華府としているのは適切でないとしている。その際に、同書の一つ前に「芝州忻城郡」の条があり、その位置を「今在広西省慶遠府有忻城県。唐代的芝州就在这個地区。」<sup>(15)</sup>としている。いずれにしても、唐代の芝州忻城郡と武峨州武峨県を、ともに広西省慶遠府に位置したとしているのである。但し、先に指摘したように、『太平寰宇記』の武峨州の条には脱漏による誤りがあり、それを根拠としていることに注意する必要がある。とはいえ、この説によれば武峨州の属県としての武夷県も、慶遠府境内ということになる。なおここでいう広西省慶遠府とは、先に見た唐代の宜州であり、宋代の慶遠府であり、今日の広西チワン族自治区宜山県一帯である。

ともあれ、唐宋時代における武峨州には、ベトナムの「広南省升華府」説と中国の「広西省慶遠府」説とがあり、いずれが妥当であるかを断定しがたい。唐代における武峨州の領県である武夷県の位置についても、二説があり得るのである。ただ「武夷県之印」が広西チワン族自治区隆安県境内から出土しており、唐代における武夷県の位置としての「広西省慶遠府」

説を補強する材料となり得るのではなからうか。その意味からもまさに「武夷県之印」は、隆安県境内から出土した貴重な官印といえよう。

なお王克榮氏は、この官印のサイズを二辺五・五センチとしているが、<sup>(16)</sup>実測したところ五・四センチであった。

## (二)「純化県之印」

純化県の地理的沿革について、『旧唐書』巻四一・地理志、嶺南道桂管の条に、

桂州下都督府、隋始安郡。武德四年、平蕭銑、置桂州総管府、管桂・象・静・融・賀・楽・荔・南昆・竜九州、并定州一総管。其桂州領始安・福祿・純化・興安・臨源・永福・陽朔・帰義・宣風・象十県。

とあり、武德四（六二一）年に設置された桂州総管府は九州を管轄し、その一つである桂州の「属県一〇」の中に「純化（県）」がある。また『新唐書』巻四三上・地理志、嶺南道の条に、

桂州始安郡、中都督府。至德二載、更郡曰建陵、後復故名。土貢銀・銅器・麋皮鞞・簞。戸万七千五百、口七万一千一十八。県十一。……

恭化、中下。本純化、武德四年、析始安置、永貞元年、更名。

とあり、桂州都督府の統轄する県の一つとして「恭化県」がある。この恭化県は武德四（六二一）年に設置された「純化県」を、永貞元（八〇五）年に改名したものである。なお『元和郡県図志』巻三七・嶺南道、桂管経略使の条に、

慕化県、中下。東北至州二百五十里。武德四年、析始安県。

とあり、また『太平寰宇記』巻一六二・嶺南道、桂州の条に、

慕化県、西南二百二十里、元二郷。本漢潭中県地。晋太康元年、分呉所置武豊県。置長安県於此県。蕭齊又於県置常安戌。梁大同八年、於県置梁化県。郡改長安県為梁化県。十八年、改梁化県為純化県。隋大業二年省。唐武德四年、復置純化県。永貞元年十二月、改為慕化県、以避憲宗廟諱。梁開平元年、復為歸化県。後唐同光初、復為慕化県。とあり、桂州管下の恭化県とともに「慕化県」としている。なお『読史方輿紀要』卷一〇七・広西、永寧州の条に、

古田廢県。今州治。漢始安県地。唐武德四年、分置純化県、属桂州。永貞初、改為恭化県。乾寧二年、析置古県、仍属桂州。五代因之。

とあり、また同条に、

恭化廢県。在州東。唐置。本曰純化、後改曰恭化、避憲宗諱也。五代梁開平元年、湖南奏改曰歸化県、後唐同光初、復曰恭化。宋因之。後并入古県及臨桂県。

とある。さらに『(嘉慶版) 広西通志』卷一〇・郡県沿革表、唐・桂州始安都督府の条に、

慕化県、中下。武德四年、析始安県置。

とあり、同書卷一一・郡県沿革表、宋・桂州始安郡の条に、

慕化県、本漢潭中県地。晋太康元年、分呉所置武豊県、置長安県於此。

蕭齊又於県、置常安戌。梁大同八年、於県置梁化郡、改長安県為梁化県。十八年、改梁化県、為純化県。隋大業二年省。唐武德四年、復置

純化県。永貞元年十二月、改為慕化県、以避憲宗廟諱。梁開平元年、復為歸化県。後唐同光初、復為慕化県。

とある。

唐代の「純化県之印」は、純化県が置かれた武德四(六二二)年から、「恭化県」に改名された永貞元(八〇五)年までの間に鑄造されたものである。

なお唐代の純化県(後の恭化県)について、『中国古今地名大辞典』には、「恭化県」晋置常安県、南朝梁改置梁化県、隋改曰純化、唐改曰恭化、宋廢、故治在今広西古化県南。」とあり、また雷堅編著『広西建置沿革考録』<sup>(18)</sup>には、「純化県 唐朝政区。治所在今鹿寨県治北中渡鎮潘圩一带」とあり、今日の広西チワン族自治区桂林市近くの鹿寨県と永福県との境界に位置していた。

桂林博物館に所蔵されている「純化県之印」は、文化大革命が収束した一九七七年(月日不明)に、永福県景春城公社磐洞大隊で、農民が石灰を焼く窯を造っているときに掘り出し、それを永福県文県物管理所に届けたものという。<sup>(19)</sup>なお『広西壮族自治区館藏文物珍品目録』は、「一九七〇年代永福県景春城公社磐洞大隊」としている。<sup>(20)</sup>

この官印が出土したという永福県とは、桂林市から南に約五〇キロほどの地点である。永福県城より東北部に盤洞があり、かつての「景春城公社磐洞大隊」と思われ、現在の広西チワン族自治区蘇橋郷盤洞村であろう。<sup>(21)</sup>

### (三) 「驪州之印」

驪州の地理的沿革について、『隋書』卷三二・地理志に、

日南郡。梁置德州。開皇十八年、改曰驪州。統県八、戸九千九百一十五。

とあり、南朝の梁が置いた德州を隋の開皇一八(五九八)年に驪州と改め



たという。また『旧唐書』卷四一・地理志、嶺南道安南府の条に、

驩州。隋日南郡。武德五年、置南德州総管府、領德・明・智・驩・林・源・景・海八州。南德州、領六県。八年、改為德州。貞觀初、改為驩州、以旧驩州為演州。二年、置驩州都督府、領驩・演・明・智・林・源・景・海八州。十二年、廢明・源・海三州。天宝元年、改為日南郡。乾元元年、復為驩州也。旧領県六、戸六千五百七十九、口一万六千六百八十九。天宝領県四、戸九千六百一十九、戸五万八百一十八。……東至大海一百五十里、南至林州一百五十里、西至環王国界八百里、北至愛州界六百三里、南至尽当郡界四百里、西北到靈跋江四百七十里、東北至弁州五百二里。

とあり、さらに『新唐書』卷四三上・地理志、嶺南道の条に、

驩州日南郡、下都督府。本南德州、武德八年、曰德州、貞觀元年、又更名。……戸九千六百一十九、口五万八百一十八。県四。九德・浦陽・越裳・懷驩。

とある。なお『元和郡県図志』卷三八・嶺南道、安南上都護府の条に、

驩州。日南、下府。開元戸六千六百四十九。郷十四。元和戸三千八百四十二。郷六。古越地九夷之国。越裳氏重九詛者也。在秦為象郡。漢平南越、又置九真。吳煬命侯天紀二年、分九真之咸驩県置九德県、属交州。梁武帝於此置德州。開皇十八年、改為驩州、取咸驩県為名也。大業三年、改為日南郡。武德五年、改為南德州。仍置総管府。貞觀元年、改為驩州。兼管羈縻州六。……東至海一百里。南至林邑国界一百九十里。北至演州一百五十里。

とあり、隋の大業三（六〇七）年に日南郡と改め、武德五（六二二）年に

南德州とし、貞觀元（六二七）年に驩州に改めたという。また『太平寰宇記』卷一七一・嶺南道、驩州の条に、

驩州。日南郡、今理九德県。古越裳氏国、九詛所通。秦属象郡。二漢属九真郡。吳置九德郡。晋・宋・齐因之。隋置驩州、後為日南郡。唐武德五年、置南德州総管府。領德・明・知・驩・杜・源・七・海八州。南德州領六県。八年、改為九德。貞觀初、改為驩州。又改為演州。二年、置驩州都督府、領驩・源・明・智・演・林・景・海八州。十三年、廢明・源・海三州。天宝元年、改為日南郡。乾元元年、復為驩州、放驩兜於崇山、即此也。

とある。なお『文献通考』卷三二三・輿地考、安南都護府の条に、

驩州。古越裳氏国、重九詛者也。秦属象郡。二漢属九真郡。吳分置九德郡。晋・宋・齐因之。隋置驩州。後為日南郡。唐為驩州、或為日南郡、属嶺南道。……宋無此州。

とあり、また『讀史方輿紀要』卷一一二・広西、安南又安府の条に、

驩州城。在府西南。相伝即古越裳氏国。周成王時、重三詛而猷白雉者也。秦属象郡。漢属九真郡。後漢因之。三国吳分置九德郡。治九德県。晋・宋以後因之。梁兼置德州。大同七年、交趾李賁監德州。遂結数州豪傑以叛、尋討平之。隋平陳、廢郡存州。開皇十八年、改曰驩州。大業初、曰日南郡。唐武德五年、置南德州総管府。八年、改為德州。貞觀初、仍曰驩州。明年、兼置都督府。天寶初、曰日南郡。乾元初、復為驩州。至今不廢。通典、郡東南至海百七十里。南至羅伏国界百五十里。西至環王国界八百里。新唐書、驩州地限重海、与文單・占婆接界。とあり、さらに『嘉慶版』広西通志』卷一二・郡県沿革表、宋・鬱林州

化外州の条に、

下演州、歴代地理与驪州同。唐武德五年、立驪州。貞観九年、改為演州、而別立驪州。十六年、州廢入驪州。広徳二年、析驪州、復立本忠義郡、亦曰竜池郡、又曰演水郡。領県二、下忠義県・下竜池県。<sup>(22)</sup>とある。

唐代の驪州について、『中国古今地名大辞典』には、『驪州』南朝梁置徳州。隋改曰驪州。尋曰日南郡。唐復置南徳州。改曰徳州。尋復曰驪州。又改曰日南郡。後復為驪州。在今安南北部。<sup>(23)</sup>とあり、また『中国歴史地名大辞典』には、『驪州 唐武徳五年置、治所在九徳県。(今越南義安省演州西安城)』とあり、ベトナムの義安省演州西安城としている。<sup>(24)</sup>

この官印の所蔵者である南寧市在住の文有錚氏は、その収蔵経緯について次のように伝え、『二〇〇〇年三月に南寧花鳥市場にて、憑祥市より来た人から三〇〇元で買い求めた』という。ただその出土地点などについては、全く不明であるという。なお蔣廷瑜氏は、この「驪州之印」を唐代の官印であるとしている。

#### (四)「平琴州之印」

平琴州の地理的沿革について、『旧唐書』卷四一・地理志、嶺南道桂管の条に、

平琴州、下。漢鬱林郡地。唐置平琴州、無年月。領県四。天宝元年、改為平琴郡。乾元元年、復為州。建中併入党州。今存。領県四、戸一千一百七十四。至京師六千四百八十里、至東都五千八百三十里。西至鬱林州九十里、東南至牢州一百一十里、北至貴州一百五十里、北至繡

州九十二里、東至党州二十二里。容山、州所治。本名安仁、至徳年改也。懷義・福陽・古符、三県与州同置。

とあり、また同志、嶺南道、邕州の条に、

党州下。古西甌所居。秦置桂林郡、漢為鬱林郡。唐置党州、失起置年月。与平琴州同土俗。西至平琴治所二十二里。天宝元年、以党州為寧仁郡。乾元元年、復為党州。建中二年二月、廢平琴州併入。領県四、戸一千三百、口七千四百。至京師地理、与平琴州同。

とあり、唐代に平琴州が設置されたが、その年を不明とし、天宝元(七四二)年に一時平琴郡と改め、乾元元(七五八)年に州に復し、その後建中二(七八一)年二月に平琴州を廢し、党州に併入したとする。さらに『新唐書』卷四三上・地理志、嶺南道の条に、

党州寧仁郡、下。本鬱林州地、永淳元年、開古党洞置。土貢金・銀。戸千一百四十九、口七千四百四。県八。撫安、下。古西甌地。善勞、中下。善文、下。寧仁、下。容山、下。本安仁、永淳二年、析党州置平琴州平琴郡、領安仁・懷義・福陽・古符四県。垂拱三年廢、神竜三年、復置。至徳中、更安仁曰容山。建中二年、州廢、県皆来属。懷義、下。福陽、下。古符、下。

とあり、永淳二(六八三)年に党州を分割して平琴州を設置し、垂拱三(六八七)年にそれを廢止し、神竜三(七〇七)年にまた置き、建中二年に平琴州を廢止し、その属県を党州に繰り込めたとする。また『太平寰宇記』卷一六五・嶺南道、鬱林州の条に、

廢平琴州、本平琴州、理容山県。漢鬱林郡。唐置平琴州、建中十二年、併入党州。元領容山・懷義二県。尚列於廢党州、其福陽・古符二県、

已絶。

とあり、さらに『読史方輿紀要』卷一〇八・广西、鬱林州の条に、

容山廢県。州西北八十里。唐永淳初、置安淳県、属党州。二年、析置

平琴州治焉。兼領懷義・福陽・古符三県。垂拱三年、州廢。神竜三年、

復置。天宝初、曰平琴郡。至德二載、改安仁曰容山県。乾元初、復改

郡爲州。建中二年、州廢、県皆属党州。南漢因之。開宝中、容山・懷

義等県、俱省入南流。

とある。なお『嘉慶版』广西通志』卷一〇・郡県沿革表、唐・鬱林州の条に、

平琴州平琴郡、今理容山県。旧鬱林郡地。大唐置平琴州、或平琴郡。

領県四、容山・懷義・福陽・古符。

とあり、また同書卷一一・郡県沿革表、宋・党州化外州の条に、

平琴州、下、平琴郡。領容山・福陽・古符四県。

とある。ところで、先に「鬱林州化外州」とあり、また「党州化外州」とあるが、宋代の「化外州」については、羈縻州県との関連を含めて、中華世界における国家の構造を考えていく上でも重要であり、今後改めて検討したい。

唐代の平琴州の位置について、『中国古今地名大辞典』には、「平琴州」

唐置。亦曰平琴郡。故治在今广西林県西北百里。」とあり、また雷堅編著

『广西建置沿革考録』には、「平琴州唐朝政区。治所在今玉林市治西北山心郷竜江一带。」とある。<sup>(26)</sup>なお蒋廷瑜氏は、今日の广西チワン族自治区玉林市

西北部の山心鎮と洛陽郷一带で、州治所を山心鎮竜江附近としている。<sup>(27)</sup>

唐代の平琴州は、永淳二（六八三）年に設けられ、建中二（七八一）年

唐宋時代嶺南地域の州県に関する官印

に廃止されたのであり、その間にも一時期郡に改めたことなどから、約一〇〇年ほど存在した州である。この「平琴州之印」は、まさにこの間に鑄造された官印である。なおこの官印の出土地点や上海博物館に所蔵されるようになった経緯などについては、全く不明である。

#### （五）「宜州管下羈縻都黎県印」

まず宋代における宜州について、『宋史』卷九〇・地理志、広南西路の条に、

慶遠府、下。本宜州、竜水郡、慶遠軍節度。旧軍事州。景祐三年、廢

崖山県。宣和元年、賜軍額。河池県、不詳何年併省。咸淳元年、以度

宗潜邸、升慶遠府。元豊戸一万五千八百二十三。……県四、竜水・天

河・忻城・思恩。南渡後、増県一、河池。羈縻州十、軍一、監二。

とあり、宜州が咸淳元（一二六五）年に慶遠府と改められている。宋代の宜州は、広西西北部に位置する一州であり、その管轄の羈縻州を二〇としている。宋代の宜州すなわち慶遠府の中心地は、今日の广西チワン族自治区宜山県であり、その周辺に羈縻州県が点在していたのである。なお范成大の『桂海虞衡志』志蛮の条に、

宜州管下、亦有羈縻州県十余所。其法制尤疏、幾似化外。

とあり、宜州の管轄下には一〇余の羈縻州県が存在したことを伝えている。

ところで、『宋史』卷九〇・地理志、広南西路の条に、

文州。崇寧五年、納土。大観元年、置綏南砦。紹興四年、廢。

とあり、文州は南宋の紹興五（一一〇六）年に設置されたが、その領県を示していない。しかし、『太平寰宇記』卷一六八・嶺南道、羈縻府十五州

の条に、

文州、在宜州西山路七百二十里。州県無廨署。領県三、思陽、州南一百二十里。芝山、北一百二十里。都黎、東二里。戸、今管戸主五十二。とあり、羈縻文州の領県に「都黎（県）」がみえている。また『読史方輿紀要』巻一〇九・広西、慶遠府東蘭州の条に、

廢文州、在州東、本羈縻蛮洞。宋崇寧五年、納土、置文州。大觀初、改置綏南砦。紹興四年、寨廢。仍置文州。

とある。さらに『嘉慶版』広西通志』巻四・郡県沿革表、宋・慶遠府の条に、

羈縻文州。崇寧五年置、属宜州。

とあり、羈縻文州を北宋の崇寧五（一一〇六）年に設置したとしており、同書巻一一・郡県沿革表、宋・宜州竜水郡の条に、

今理竜水県。……文州。領県三、思陽・芝山・都黎。

とあり、また同表、宋・羈縻州県の条に、

文州、領思陽・芝山・都黎三県。……已上隸宜州。

とあり、宋代における羈縻文州の属県の一つが羈縻都黎県であり、宜州に隸属していたのである。

宋代の羈縻都黎県について、『中国古今地名大辞典』にはみえていないが、雷堅編著『広西建置沿革考録』には、「都黎県、羈縻県。宋朝政区。治所在今巴馬瑶族自治県・東蘭県一带。」としており、今日の広西チワン族自治州巴馬瑶（ヤオ）族自治県と東蘭県の一部である。<sup>(28)</sup><sup>(29)</sup>

ところで、『宋史』巻一五四・輿服志、印制の条に、

監司・州県長官曰印、僚属曰記。又下無記者、止令本道給以木朱記、

文大方寸。或銜命出境者、以奉使印給之、復命則納于有司。後以朝命出州県者、亦如之。新進土置团司、亦假奉使印、結局還之。此常制也。とあり、州県の長官に与えた官印の印文には「印」を刻したという。また同条に、

蕃国效順者、給以銅印。……宜州界外諸蛮乞印、以宜州管下羈縻某州之印為文、凡六十顆給之。其後文武百司節次所鑄、不備載。

とあり、宜州界外の諸蛮酋が帰順して「宜州管下羈縻某州之印」と刻する印文の官印（銅印）を発給するように求めたために、おおよそ六〇余個の官印を賜与し、その後文武の百司が折々に鑄造した官印は、詳細に記載することができないほどであったという。宜州管轄下の羈縻都黎県の蛮酋に対して、「宜州管下羈縻都黎県印」と刻する官印を与えたのであり、まさにその官署印の一つが、ここで紹介する官印である。

ところで、唐宋時代における羈縻州県に関する官印は、果たして官署印のみであろうか。羈縻州県の長官自身に与えられた官名印であれば、その印文は「羈縻〇〇州刺史印」あるいは「羈縻〇〇県令印」であろう。なおこのような官印について、『宋史』巻一五四・輿服志、印制の条に、

元豐三年、広西経略司言、知南丹州莫世忍貢銀・香・獅子・馬。遂賜以印、以「西南諸道武盛軍德政官家明天国主印」為文、并以南丹州刺史印賜之、仍詔経略司毀其旧印。

とあり、また同書巻四九四・蛮夷伝、南丹州蛮の条に、

元豐三年入貢、其印以「西南諸道武盛軍德政官家明天国主」為文、詔以南丹州印賜之、令毀其旧印。

とあり、元豐三（一一〇八）年に南丹州蛮の莫世忍が入貢した。彼は南丹

州刺史に任命され、「西南諸道武盛軍德政官家明天国主印」と「南丹州刺史印」を賜与され、旧（以前に与えられた）の印を返却している。この印はともに官署印というよりも、官名印というべきものである。なお同条に、

紹興三年、公晟攻囲観州、焚宝積監。朱勝非奏、崇・観・宣和間、所開新辺、比来往棄而不守、帥臣・監司屢言、観州為控扼之地、不宜棄。帝曰、前日用事之臣、貪功生事、公為欺罔、其実勞民費財、使遠俗不安也。又用広南経略安撫使劉彦適言、以公晟知南丹州兼溪峒都巡檢使・提挙盜賊公事、給以南丹州刺史旧印、公晟未受命。二十四年、公晟始貢馬、率諸蛮來帰。帝諭輔臣曰、得南丹非為広地也、但猛人不叛、百姓安業、為可喜耳。遂以延沈襲公晟職、授銀青光祿大夫・檢校太子賓客・使持節南丹州諸軍事・南丹州刺史兼御史大夫・知南丹州公事・武騎尉。広西経略安撫使呂愿中論降諸蛮三十一種、得州二十七、県一百三十五、砦四十、峒一百七十九及一鎮・三十二団、皆為羈縻州県。

とある。少し長い引用となったが、異民族地域における州県の長官に任命される者は、土着の異民族指導者（蛮酋）であり、彼らに官印が賜与されたことを指摘しなかったのである。ここに引用した宋代の南丹州とは、宜州の近辺であり、広西西北部に位置した羈縻州である。

次にこの「宜州管下羈縻都黎県印」の印背に刻された款記には、「紹興二十四」・「年文思院鑄」とあるが、『宋史』卷一六五・職官志、少府監の条に、

文思院、掌造金銀・犀玉工巧之物、金采・絵素装鈿之飾、以供輿輦・冊宝・法物凡器服之用。

唐宋時代嶺南地域の州県に関する官印

とあり、文思院が「冊宝」すなわち冊書や璽印などをととのえる機関であり、この官印は南宋の紹興二四（一一四二）年に文思院で鑄造した官署印なのである。

#### おわりに

以上のように本稿では、これまでに現地で確認した唐宋時代嶺南地域の州県に関する五つの官印を紹介した。但し、軍事関係の官印については対象外としたために、今後改めて取り上げてみたい。また清代の印譜中には唐宋時代の官印がみえており、その中に嶺南地域の官印が存するか否かを含め、改めて伝世印についても検討してみたい。<sup>(30)</sup>

なお本稿で取り上げた州県に関する官印の中には、「武夷県之印」や「驪州之印」および「宜州管下羈縻都黎県印」のような羈縻州県に関する官印もある。今日でも当該地域は、チワン族をはじめとして多くの少数民族が居住している。<sup>(31)</sup>これらの民族の歴史を見ていく上でも、このような官印の検討が有意義であると考ええる。とりわけ、元明清時代における広西土司制度を究明していくためにも、唐宋時代の羈縻州県について検討を積み重ねていくことが重要であり、その一環として取り上げたのである。

一方、嶺南地域の出土文物などを取り上げ検討してみると、今日における国家の枠組みにとらわれた、いわゆる中国史あるいはベトナム史といった認識の仕方のみならず、これらの地域を一体とした歴史世界として見ていくことの必要性を感じる。

かつて「広西發現土官印考」を発表したが、その中に「平祥土州印」（広西チワン族自治区博物館所蔵）という官印を取り上げた。この官印は

広西チワン族自治区田東県で發現したベトナム(陳朝大治五・一三二六年)の官印である。<sup>(32)</sup>この官印にみえる「平祥土州」とは、果たして今日のどの地点であるかということで、中国の学者とベトナムの学者との間に、微妙な見解の相違を感じた。また本稿で取り上げた「武夷県之印」および「驩州之印」は、ともに唐代の官印である。その武夷県と驩州とは唐朝の疆域であり、今日における中国の広西チワン族自治区西部からベトナムの北部に跨る地域であり、その地域に関わる官印なのである。たまたま三つ官印を取り上げてみても、中国の広西西部とベトナムの北部とは、関わりが極めて密接であることを指摘することができる。このように前近代における当該地域の出土資料は、現代の国家の枠組みをそのまま持ち込んだ歴史認識のみで理解することが困難であり、そのような認識の枠組みを取り外した、新たな視点を採り求める必要があるのではなからうか。少なくとも当該地域には、国家の枠組みを越えて生き続けた人々によって営まれた歴史が展開していたのである。

ただ本稿では、五つの官印の紹介にとどまり、唐宋時代の羈縻州県における支配構造やその実態について、殆ど言及することができなかった。今後は当該地域における関連の官印を探し求めるとともに、唐宋時代の羈縻州体制についてもさらに検討を加えていきたい。それによって唐宋時代のみならず、中国歴代諸王朝の異民族地域に対する支配の実体を明らかにすることができるようではなからうか。

注

(1) 拙稿「広西發現土官印考」(『東洋大学アジア・アフリカ文化研究所研究年

報』一九九六年、一九九七年三月)。

(2) 広西壮族自治区文化庁文物処・広西壮族自治区文物管理委員会弁公室編『広西壮族自治区館藏文物珍品目録』(広西民族出版社、一九九八年七月)二五一頁〜二五五頁には、広西における軍事関連の官印も列挙している。

(3) 岡田宏二「唐代の羈縻政策…特に羈縻府州体制を中心として」(『中国華南民族社会史研究』所収、汲古書院、一九九三年六月)。

(4) 王克榮「広西隆安県發現唐代銅官印」(『文物』一九九〇年第一期)。

(5) 前掲「広西壮族自治区館藏文物珍品目録」二五二頁。

(6) 孫慰祖「若干唐官印的考釈及相關問題」(『孫慰祖論印文稿』所収、上海書店出版社、一九九九年一月)一六七〜一六九頁、蔣廷瑜「平琴州之印」考」(『玉林日報』一九九七年八月九日)、同「宜州管下羈縻都黎県印」考」(『河池師專學報(社会科学版)』一九九七年第三期)。

(7) 孫慰祖前掲書一六七〜一六九頁、同「隋唐官印体制的形式及其主要表現」(『中国古璽印学国際研討会論文集』所収、香港中文大学文物館、二〇〇〇年三月)、小林斗庵「隋唐印について…日本古印の原流」(『ミュージアム』第一四九号、一九六三年八月)。

(8) 葉其峰「歴代官印及其基本特徵」(『古璽印与古璽印鑑定』所収、文物出版社、一九九七年一〇月)二二〜二三頁。

(9) 葉其峰前掲書二二〜二三頁。

(10) 上海博物館編『上海博物館藏印』卷一〇・唐宋西夏金官印、唐の条に「平琴州之印 背刻平琴州 銅 杙紐 一」とあり、また同卷、宋の条に、「宜州管下羈縻都黎県印 背刻紹興二十四 年文思院鑄 銅 直紐 十六」とある。

(11) 上海博物館研究員孫慰祖氏の協力を得る。なお孫慰祖氏には前掲書の他に「孫慰祖印稿」(上海書店出版社、二〇〇〇年六月)などがある。

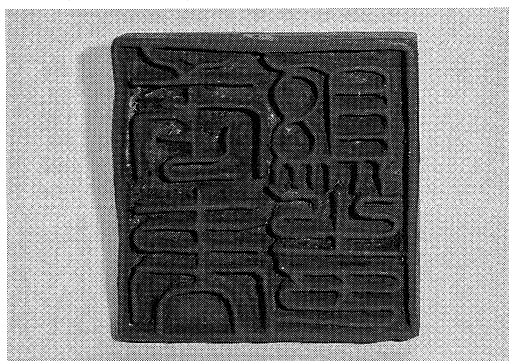
(12) 蘇潯撰『万曆版』広西通志(全四二卷、萬曆二七年序)。

(13) 臧励蘇等編『中国古今地名大辞典』(商務印書館、一九三一年五月)五〇三頁。

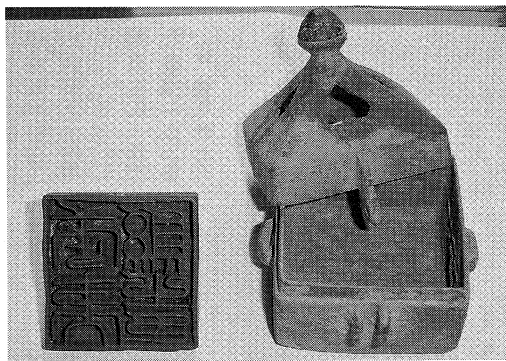
(14) 越 陶維英著、鐘民岩訳、岳勝校『越南歴代疆域』(商務印書館、一九七三年二月)一三三頁。

(15) 同上。

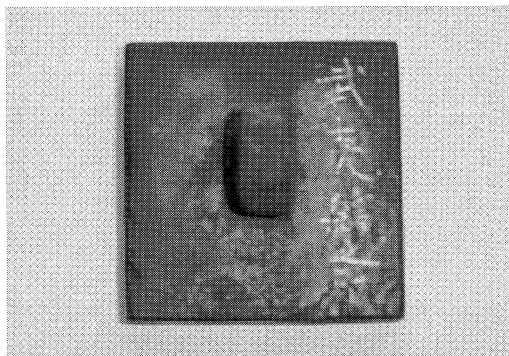
- (16) 王克榮前掲論文。なお前掲『広西壮族自治区館藏文物珍品目録』二五二頁も、「五・四cm」としている。
- (17) 前掲『中国古今地名大辞典』七〇一頁。
- (18) 雷堅編著『广西建置沿革考録』（广西人民出版社、一九九六年一月）四三八頁。
- (19) 桂林博物館保管部主任唐奇嶺氏の談。
- (20) 前掲『广西壮族自治区館藏文物珍品目録』二五一～二五五頁。
- (21) 何為彦編著『永福県鄉村概述』（永福県地名委員会、一九九七年九月）二四六頁。
- (22) 謝啓昆・胡虔等撰（嘉慶版）『广西通志』（全二七九卷、嘉慶六年刊）。
- (23) 前掲『中国古今地名大辞典』一四〇八頁。
- (24) 魏嵩山主編『中国歴史地名大辞典』（広東教育出版社、一九九五年五月）一三〇四頁。
- (25) 前掲『中国古今地名大辞典』二二四頁。
- (26) 雷堅前掲書四一八頁。
- (27) 蒋廷瑜前掲「平琴州之印」考」。
- (28) 雷堅前掲書四五五頁。
- (29) 蒋廷瑜前掲「宜州管下羈縻都黎県印」考」。
- (30) 羅振玉『隋唐以来官集存』（三冊、一九一六年）、『貞松堂唐宋以来官印集存』（一冊、一九二三年）。
- (31) 莫家仁・陸群和著『广西少数民族』（广西人民出版社、一九九六年二月）。
- (32) 前掲「广西發現土官印考」。なお平祥土州印については、于鳳芝「广西田東県發現越南古代銅官印」（『印支研究』一九八三年第四期）参照。



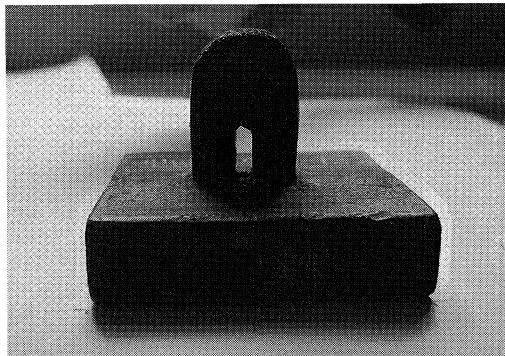
①-1 「武夷県之印」(印影)



①-2 「武夷県之印」(印影と盒子)



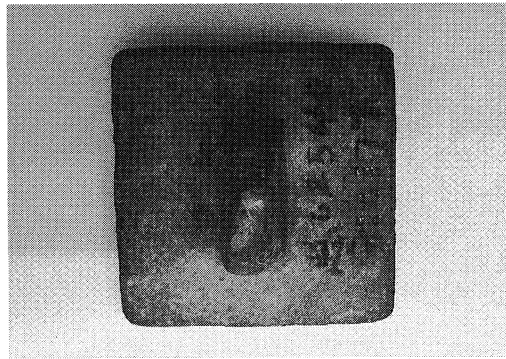
①-3 「武夷県之印」(款記)



①-4 「武夷県之印」(鼻鈕)

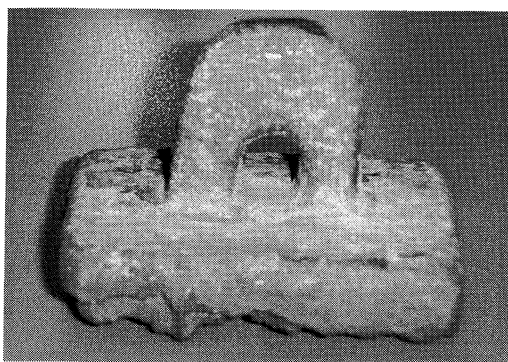


②-1 「純化県之印」(印影)



②-2 「純化県之印」(印背)

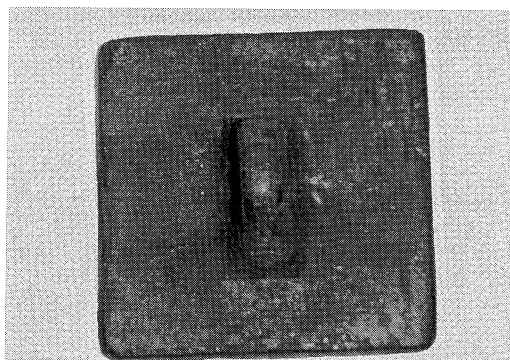




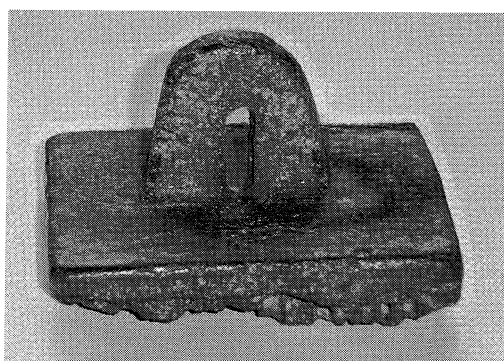
②-3 「純化県之印」(鼻鈕)



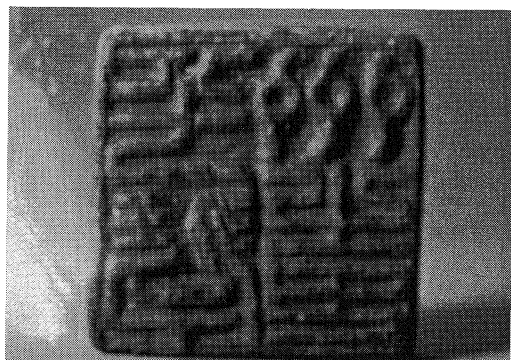
③-1 「驩州之印」(印影)



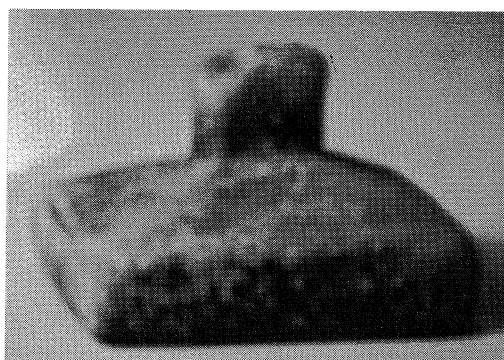
③-2 「驩州之印」(款記)



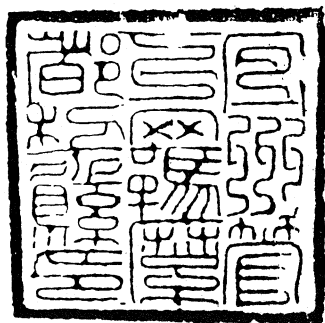
③-3 「驩州之印」(鼻鈕)



④-1 「平琴州之印」(印影)



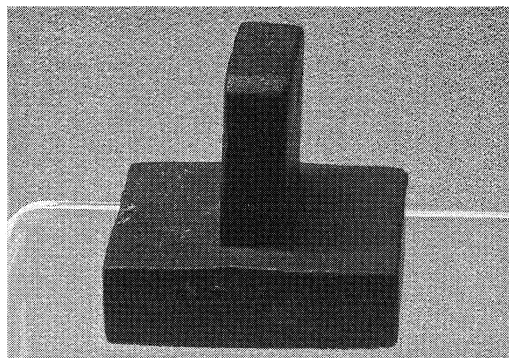
④-2 「平琴州之印」(槪鈕)



⑤-1 「宜州管下羈縻都黎県印」(印影)



⑤-2 「宜州管下羈縻都黎県印」(款記)



⑤-3 「宜州管下羈縻都黎県印」(槲鈕)



⑤-4 展示中(右から二つ目)